

信州大学創立60周年記念事業
ネパール登山報告書

2009年ネパール登山報告書



信州大学学士山岳会
信州大学山岳会

信州大学創立60周年記念事業
ネパール登山報告書



きぼう　　さら
希望は高しいや更に

ネムジュン頂上稜線
(撮影：大木信介)



あゝ信州よ山の国 誇りは高しアルペンの
峯に輝く雪を以て 希望は高いや更に
さらば歌はむ諸共に 若き血潮のゆくまゝに
あした夕べの友は山 山は我等の姿なる
山は我等の姿なる

思誠寮々歌

序

国立大学法人信州大学
学長 山沢 清人

信州大学はお蔭様で平成21年に創立60周年を迎えることができました。

昭和24（1949）年に長野県内の高等教育機関8校を母体として発足して以来、学生、卒業生や教職員、そして地域の皆様に支えていただきながら、順調に発展することができました。60周年記念式典では、学生サークルや教員、附属学校からも参加して、まさにオール信州大学体制で盛り上げてくれ、記念コンサートでは地域の皆様もお招きしてお楽しみいただきました。

信州大学学士山岳会のネパールヒマラヤ登山も、創立60周年記念事業の一環として企画してくださいました。未知で困難な世界に挑む現役学生メンバーを経験豊富なOBの先輩方が教え導いて、初登攀を含む大成功をおさめられたのは、皆様ご承知のとおりです。日々更新されるブログを見ながら日本で応援していた信州大学関係者にも、安堵と大きな喜び、希望を与えてくださいました。この貴重な経験が、名門として知られる信州大学山岳会のさらなる発展につながるものと確信しております。

さらに今回の登山で特筆すべきは、本学山岳科学総合研究所と連携しての学術調査や研究も行われていることです。7,000m級の峰々が聳える“世界の屋根”での調査研究は、信州大学ならではの個性的で価値ある成果といえるでしょう。

さて、この度、記念事業の報告書が発行される運びとなりました。多くの収穫を得た記念事業の内容が詳細に紹介されております。写真などがふんだんに盛り込まれ、クライマーの皆様にはもちろんのこと、一般の方にも見て楽しんでいただけるものになっております。多くの方々にご活用いただければ幸いです。

2009年ネパール登山報告書の刊行にあたり

信州大学学士山岳会 会長 宮崎 敏孝

信州大学 特任教授（教育）

信州大学 山沢 清人学長の『序』に明記されているように、信州大学創立60周年記念事業の一環として企画、実行した信州大学学士山岳会60周年記念事業報告書を刊行する段階になりました。この報告書の刊行を原稿執筆者、参加者および実行委員、学士山岳会会員ならびにこの企画に対し様々な立場から賛同されご支援を惜しまれなかった大勢の関係者の皆様方とともに慶びたいと考えます。

今日まで、信州の地域性を最大限に活用した山行を継続し、また、最初の海外遠征隊を派遣してからも40余年が経過したことになります。この間に私たちは下記十数回の海外登山隊を組織し、四つの初登頂の実績を挙げてきました。この度、ネムジュン西壁初登攀を追加することになりました。延べ百余名のOB・現役部員がこれらの登山隊に隊員として参加し、また隊員ではなくてもこれらの遠征・登山隊に関わりを持ったOB・学生は数え切れず、今日までの信州大学学士山岳会・同山岳会の活動継続の原動力となっています。

| | |
|---------------|------------------------|
| 1967年8月～68年2月 | ネパール王国ワンダリング遠征隊 |
| 1971年2月～11月 | アンナプルナⅡ峰（7937m） |
| 1975年9月～10月 | ナンダグンデイ東峰（6100m）〔第2登〕 |
| 1978年2月～6月 | ジュティ・パフラニ峰（6850m）〔初登頂〕 |
| 1978年8月～10月 | ニルギリ・サウス峰（6839m）〔初登頂〕 |
| 1980年2月～5月 | ガネッシュ・ヒマールⅡ峰（7111m） |
| 1982年8月～10月 | ガネッシュ・ヒマールⅡ峰（7111m） |
| 1982年8月～10月 | アンナプルナⅡ峰南稜（7937m） |
| 1994年8月～11月 | ギャジカン峰（7038m）〔初登頂〕 |
| 1996年8月～11月 | ラトナチュリ峰（7035m）〔初登頂〕 |
| 2000年3月～6月 | ガネッシュ・ヒマールⅡ峰（7111m） |

〔記録未編集、未公表の登山隊〕（個人山行の詳細は不詳）

1987年チュールイースト遠征隊、1989年コンデリ登山隊、1990年ハン・テングリ峰登山隊、1991年パルチャモ登山隊、1993年第二次アンナプルナⅡ偵

察隊、1993年バインダーブラック登山隊

また、それぞれの〈企画・登攀記録〉は当会の活動記録の一部であり以下の〈報告書〉として刊行、広報してきました。

『ネパール・ワンダリング報告—1967. 9～12—』(1972.12)

『アンナプルナ・Ⅱ—1971年信州大学ネパール・ヒマラヤ遠征隊の記録—』
(1972.12)

『ネパール・ヒマラヤ—1978年信州大学遠征隊の記録（ナンパ南峰、
ニルギリ南峰）』(1984.9)

『1994年信州大学・ネパール警察合同マラヤ遠征隊登山報告
—ギャジカン遠征—』(1996.5)

『1996年信州大学・ネパール警察合同マラヤ遠征隊登山報告
—ラトナチュリ初登頂報告書—』(1999.3)

『遙かなり、ガネッシュヒマールⅡ峰』(2002.5)

ここにこの度の2009年ネパール登山報告書が仲間入りします。この報告書には企画段階から共同調査・研究の連携について合意が成立していた、信州大学山岳科学総合研究所の高山域関連部門・分野からの2編の〈学術論文〉を初掲載しています。

1) 山岳環境科学部門：鈴木啓助 理学部教授

(研究所所長：大気水圏環境動態解析分野)

『アンナプルナ山群における渓流水・温泉水

およびペリヒマール山域における降雪の化学特性』

2) 高地医学・スポーツ科学部門：宮川 健 医学部大学院生

(医学部加齢適応医科学：熟年体育大学リサーチセンター研修員)

『登山中のエネルギー消費と心拍反応からみた高地順化過程』

両論文には〈新知見〉と今後の展開の可能性が明記されています。鈴木教授は〈自ら現地における試料採取を实行したい〉旨記述されました。また、宮川研修員も〈行動に伴う被験者の血液分析データが付帯できれば、人体の高所順応の機序の解明と中高齢登山者の安全登山への提言が明瞭になる〉と話されました。

40年前、20周年記念事業(1971)の学術調査収集品からの展開として、新制大学の海外学術調査隊第一号として採択された

- ①タコーラ地方の〈ピンク色のそば〉から、〈信州大そば〉〈赤そば〉〈ダッタンそば〉（日本そばの収量改善、多収量品種開発、健康食品開発）→〈ミレット類〉〈アマランサス〉（機能性食品開発）など。

海外学術調査隊第三号として採択された

- ②タコーラ地方の〈チベタン乾燥チーズ〉（酵素解析、加工過程の特性解明）から→〈プロテインの機序解析〉→→〈タンパク質アレルギー機序とその免疫機序の解明〉など。

- ③山田哲雄・岡村知彦ほか『ネパール・ヒマラヤ、ランタン谷とマルヤンデー谷の陸水の化学成分』、温泉化学、26-4、(1973.6)

などがあり、〈そば〉〈チーズ〉とも農学部において二代目、三代目の研究者により鋭意研究展開が継続しています。

60周年の学術調査の収集試料、データが展開し、山岳科学総合研究所の高山域関連部門・分野との共同調査・研究の連携について発展継続することを大いに期待したいところです。（以下の文言は『ラトナチュリ初登頂報告書』（1999）の会長、実行委員長の〈辞〉として記述して以来、再掲、再再掲していますが、今一度引用します）

〔大学の社会における使命のひとつは、様々な分野における「未知への挑戦」であり、次世代を担う若者に「未知への挑戦」の楽しさ、嬉しさ、喜び、厳しさなどをその実践を通して伝達していくことにあると考えます。信州大学の活動の一翼として「高峰への、未知・未踏への、そして困難さへの挑戦」を課題とする“登山活動”を持続・展開することへのご理解をお願いする次第です〕

第6回実行委員会で〈IT技術〉を習熟している委員より、〈衛星通信利用システム〉の提案がありました。4パーティー、65名の分散並行活動であり、現地＝国内の連絡、現地4パーティー間の連携ほか、ホームページ、ブログ、メーリングシステムを仲介した現地の行動状況の国内関係者への直接的な広報・伝達手法として採用し、運用することにしました。詳細は本文に記述されていますが〈ブログ〉へのアクセス数が1000件超にもなった事実は〈想定外事項〉でありました。記念事業としては初めての試みであり、機材購入費、機材レンタル料、通信費の総額は185万余円となりました。〈費用対効果〉を判断・評価する要素は〈信州大学山岳会・同学士山岳会の衆知広報〉ならびに〈信州大学の周知広報〉として、表面に現れ難い成果にあると思います。

この記念事業の〈計画書〉では次の文言を述べています。

〔昨今、若者の山岳離れが全国の大学で緊急に解決すべき課題になっていますが、我が信州大学山岳会の現役部員は7年生1名、4年生1名、1年生1名の計3名で、本年の3月末には1名という状況になることが確実になっています。我々は、この60周年記念事業を成功させることにより、信州大学に活力ある学生を呼び込みたいと願っており、そのことが現役部員の増大にも繋がり、規模、実力ともに大学山岳会をリードする組織になっていくものと確信しています〕

信州大学山岳会は2010年4月末、3年生1名、2年生4名、1年生7名の計12名の構成になりましたが、途切れ掛けた山岳会としての理念、目標、登攀・生活技術、情熱などの〈修復〉（現役部員による独り立ち活動）には様々な場面、状況の体感的経験の数年の蓄積が前提条件になると感じています。このことが今後の信州大学山岳会ひいては信州大学学士山岳会活動の〈土台形成〉を左右することになるのでしょう。

20周年記念事業の事務局を実質的に担当した当時を振り返ってみると今回の60周年記念事業における人的、経済的、物的状況との〈雲泥の差〉を強く感じています。当時は旧帝国大学、歴史ある私立大学とは歴然とした様々な格差があり、〈追いつけ〉〈追い越せ〉の思いで、対外的、対内的〈未知・未体験領域〉を遮二無二に開拓した奮闘の機会の数々を一種の懐かしさの想いを交えて想起しています。

実行委員長：松尾武久の〈全体総括〉でも述べられていますが、信州大学学士山岳会の今後の活動の源泉は継続する会員間の中心的世代にかかわる滞りがない世代間交代（バトンタッチ）にあると考えます。65周年、70周年、75周年記念事業を推進する〈活動継続体のあり方〉が忌憚なく議論されることを期待しつつ〈刊行の辞〉といたします。

目 次

| | |
|-------------------------|-----|
| 総 論 | 1 |
| 全体総括 1 | |
| General Overview 4 | |
| 60周年事業活動概念図 8 | |
| 第一チーム ペリヒマール登山隊 | 9 |
| 行動総括 21 | |
| 行動記録 22 | |
| 各係報告 94 | |
| 感想・雑感 122 | |
| 隊員紹介 140 | |
| スタッフ紹介 142 | |
| 田辺治さんダウラギリ峰で遭難 144 | |
| ペリヒマール登山を終えて（遺稿） 147 | |
| 田辺治列伝（10月23日・BCにて） 149 | |
| 第二チーム マナンヒマール登山隊 | 153 |
| 行動総括 161 | |
| 行動記録 163 | |
| 各係報告 184 | |
| 感想・雑感 198 | |
| 隊員紹介 210 | |
| スタッフ紹介 212 | |
| 第三チーム アンナプルナ山群一周トレッキング隊 | 215 |
| 行動総括 223 | |
| 行動記録 227 | |
| 各係報告 271 | |
| 感想・雑感 278 | |
| 隊員紹介 302 | |
| コラム 307 | |

第四チーム 小川勝追悼トレッキング隊 311

- 行動総括 319
- 行動概要 321
- 小川勝氏慰霊祭回向文 323
- 感想・雑感 330
- 隊員紹介 344

第五チーム カンテガ峰北壁ダイレクト登山隊 347

- 行動記録 355

学術調査関係 377

- 登山中のエネルギー消費量と心拍数反応からみた高地順化過程 377
- アンナプルナ山群における渓流水・温泉水およびペリヒマール山域における降雪の化学特性 382
- ネパール・アンナプルナサーキットトレッキングルートの陸水の水質組成 388

事業体制 397

- これまでの経緯 397
- 留守本部として 403
- 情報通信システム報告 404
- 海外事業全体収支表 407
- 学士山岳会 60周年記念事業全チーム日程一覧表 408
- ご後援者 410

寺田雅治さん追悼 411

編集後記 490

全体総括

60周年事業実行委員会

委員長 松尾 武久

信州大学創立60周年記念事業の一つとして、信州大学学士山岳会が計画した総ての事業が終わり、ほぼ初期の目的を達成できたことは誠に嬉しく、総勢64名の参加者の胸の中に、それぞれの思いが深く刻み込まれたのではないかと感じております。

この事業の経緯を簡単に述べますと、信州大学学士山岳会は大学創立20周年のアンナプルナⅡ峰の挑戦を最初に、節目の年に海外登山隊を組織してヒマラヤの高嶺に挑戦をしてきた実績を持っています。その流れのなかで2005年頃から、60周年の節目の年に久方ぶりに登山隊を派遣しようとする動きが少しずつ始まっていました。具体的な計画を立案する矢先の2007年1月に、今までの海外登山計画の総てに係わりを持っていた小川勝さんの急死というアクシデントがあり立案に陰が差しましたが、経験者も豊富になっており、むしろ彼の遺志を引継いで必ず登山隊を派遣しようとの動きが加速したのです。

2007年11月の総会で、実行計画の骨子が決定され、実行委員会を結成して計画を具体化していくことになりました。また2008年2月には大学の60周年事業の一つとして取り上げられることになり、大学との連携を深めていくことになったのです。

基本計画として、大学創立60周年という年は人と言えば還暦となる大きな節目の年でもありますので、一つには年齢の差を越えて数多くの会員が自らの青春時代の再現を目指して、各自の力量や希望に応じて参加できるような複数の計画を策定すること、二つには計画の主たる活動地域として、我々が初登頂を果たしたギャジカン（7,038m）、ラトナチュリ（7,035m）が属しているペリヒマール山域と1971年に始めての登山隊が挑戦したアンナプルナⅡ峰を含むアンナプルナ山域を設定しました。

その結果、五チームからなる登山隊が編成され、2008年9月から2009年11月の期間にそれぞれが遠い昔の燃えるような山に対する気持ちを奮い立たせ、活動を行うことになったのです。

第一チーム

- ①ネムジュン（7,139m）西壁のアルパインスタイルによる初登攀
- ②ヒムルン（7,126m）南西ルートからの登頂
- ③ヒムジュン（7,092m）からヒムルンへの初縦走

第二チーム

- ①ピサンピーク（6,091m）の登頂
- ②チュルーファーイースト（6,038m）とチュルーイースト（6,429m）の登頂
- ③ナルコーラを遡上しプーガオン奥のヒムルンBCに向かう激励トレッキング

第三チーム アンナプルナ山群一周トレッキング

第四チーム 小川勝追悼トレッキング

第五チーム カンテガ北壁ダイレクトライン初登攀

第一チームは、ヒムジュンからヒムルンへの縦走は状況が悪く断念しましたが、ネムジュン西壁のアルパインスタイル初登攀は今回の事業のハイライトとなりました。天候の安定しないなか、満を持しての目的達成はメンバーの卓越した気力、体力、技術力を示すものであると誇りに思います。またBCで長期間これを支えたメンバーに対しても敬意を表します。同時にヒムルンの頂上に現役の学生一名を含めた7名が立ったことは、次の世代へ確実に松明が引き継がれたものと確信いたしました。

第二チームは、5名の隊員のうち60歳以上のメンバーが4名という編成でありながら、ヒマラヤのピークに登りたいという情熱で、ピサンピークの頂上に立ったことは素晴らしいことでした。目標としていたもう一つのチュルーファーイーストはピサンピークに立てなかった隊員のために全員登頂を望んで引延ばした結果、悪天候の到来となり途中で引き返さざるを得なくなりました。誠に残念なことではありましたが「これぞ信州大学山岳会が永年育んできた魂」と多くの会員がその判断に喝采したことを明記しておきます。またヒムルンBCに向かう激励トレッキングは計画どおり実行いたしました。

第三チームは平均年齢65・4歳という高齢集団でしたが、総距離数約200kmのアンナプルナ山群一周を踏破しました。最高地点5,416mのトロンパスも全員無事に越えることができました。途中ピサン村のサラタンコーラのBC跡でアンナプルナⅡ峰の頂上稜線で眠っている佐藤正敏さんの霊と38年ぶりに会



うことが出来ましたし、またピサンBCでピサンピークから下山してくる第二チームと感激の再会を果たしました。ただ、心残りは寺田雅治さんが、関西空港へ到着後JRの中で急死され、ご家族の待つ自宅への帰還がかなわなかったことであります。心より哀悼の意を表します。

第四チームは過去の海外登山計画の総てに携わってきた小川勝さんの追悼が目的で編成され、彼と関わりがあった仲間達がガンジス河につながるナラヤニ川で散骨を行いました。信州大学山岳会を心から愛した故人に少しでも報えたかなと思っております。

第五チームは、本隊事業とは時期は異なる2008年秋にカンテガ北壁ダイレクタイトラインの初登攀を目指しましたが、壮絶な登攀の最後の段階でアクシデントがあり不本意ながら撤退を余儀なくされました。しかし、果敢な挑戦に拍手を送りたいと思います。

また、国内事業についても「上高地サマーテント」「花の山旅、高山植物観察教室」「ローツエ南壁写真展と講演会」「信州大学山岳会・学士山岳会ホームページの充実」等の事業が執り行われ、多くの学士山岳会会員やその関係者の方々の参加を得たことは喜ばしいことでした。

今回の事業は会員と関係者の熱烈な支援と『信州大学学士山学会小川勝山岳基金』の適用があったことにより、大きな成果を挙げることができたといえます。ここにあらためて関係各位のご指導ご鞭撻に感謝の意を表します。

また、この事業に係わった会員はこの経験を後輩にきちんと引き継ぐ責務があり、これからの70周年に向けてエネルギーを溜めて欲しいと思います。そしてそのことが信州大学山岳会の現役学生の増大に繋がり、規模、実力ともに日本の大学山岳会をリードする組織になって行くものと信じております。

General Overview

The 60th Anniversary Projects Executive Committee
Takehisa Matsuo, Committee Chairman

As part of 60th anniversary celebrations of Shinshu University, the whole project that was planned by The Academic Alpine Club has been completed. It's with the greatest satisfaction for us, participants that we successfully achieved the original goals and I think that 65 members have deep feelings about it in their own mind.

I here indicate the main activities, Shinshu Univ. Academic Alpine Club has achieved satisfactory results which were starting with reaching the summit of Peak Annapurna II as the 20th anniversary of Shinshu University, and we organized parties for reaching the summit peaks of the Himalayas on several occasions. Meanwhile, since 2005, we got the idea to organize parties to attempt to scale Himalayas as 60th anniversary. However, just when we draw up the concrete plans in January, 2007, Mr. Masaru Ogawa who had been involved with the project died. Because of his sudden death, the project was faced with a difficulty for a period of time. Meanwhile we decided on second thought to carry on the project with experienced members to realize a long-cherished desire of Mr. Masaru Ogawa.

At the general meeting in November, 2007, an outline for the implementation plan and executive committee were formed. Then in February, 2008, the plan was adopted as the 60th anniversary celebrations of Shinshu University. It was the opportunity to strengthen relationship with the university.

The year of 60th anniversary of the foundation, which is 'Kanreki' years (60 years old) in human years. So, as the master plan, firstly to draw up various activities available to many people with memories of their younger days and at the level appropriate for their age and climbing ability. Secondly

we picked out as the main area of activity, Peak Gyajikang (7,038m) and Peak Ratnachuli (7,035m) belong to Peri Himal area where we climbed successfully for the first time and also pick out Annapurna area, includes Peak Annapurna II where we had first tried to reach the summit in 1971.

Thus, we organized five(5) units and started activities with rekindling the passion of our youth for the climbing mountains.

The First Unit

1. The first climbing to the west face of Peak Nemjung Himal (7,139m) by alpine style
2. The climbing to Peak Himlung Himal (7,126m) by new route
3. The first traversal from Peak Himjung Himal (7,092m) to Himlung Himal

The Second Unit

1. The climbing to Pisang Peak (6,091m)
2. The climbing to Chulu Far East (6,038m) and Chulu East (6,429m)
3. Supportive trekking, Running Naru Khola for Himlung BC at the back of Pugaon

The Third Unit: The trekking around the Annapurna

The Fourth Unit: The memorial trekking for Mr. Masaru Ogawa

The Fifth Unit: The first climbing to the direct line of Peak Kantega north face

The First Unit abandoned traversing from Peak Himjung Himal to Himlung Himal by bad weather, However, the success of climbing to the west face of Peak Nemjung Himal was highlight of this project.

We are proud of their excellent skill mentally and physically under adverse conditions.

And also I pay tribute to all members who supported them at BC over a prolonged period.

At the same time, 7 members includes one student stood on top of the Peak Himlong Himal. It was like taking over torches from one generation to the next.

The Second Unit, includes 4 members who are over 60 years out of 5 people could stand on top of the Pisang Peak successfully with a desire to achieve. Another challenge of them, the climbing to Chulu Far East, they were unfortunately forced to give up due to the inclement weather in spite of fact that they decided to go Chulu Far East by whole members for the people who could not go climbing to Pisang Peak.

This is unfortunate, but many of the members gave applause to their tough decision as “This is the valuable spirit that has been developed over the years by Shinshu Univ. Academic Alpine Club!”

In addition, Supportive trekking to Himlun BC was carried out and succeed.

The Third Unit whose average age was 65.4 years and this is quite aged group. Though they trekked the whole distance nearly 200 kilometers around the Annapurna and they climbed over Thorung-pass, the highest point of 5416m by everyone. The party stopped over Salathang Khola in Pisang Village on the way and consoled the soul of Mr. Masatoshi Sato who had died on the ridge line of Peak Annapurna II for the first time in 38 years. At Pisang BC, they were reunited with The Second Unit members who had descend from Pisang Peak. However, the only sorrow is the fact that Mr. Masaharu Terada has unexpectedly died in the JR train from Kansai Int’l Airport on his way back home. I herewith express my heartfelt sorrow over him.

The Fourth Unit, they were organized to pay tribute to Mr. Masaru Ogawa who had been involved with all our projects of overseas mountain climbing. The people who were associated with Mr. Ogawa scattered his ashes into River Narayani flows into Ganges.

I hope this was recompense for Mr. Ogawa who truly loved our alpine

club.

The Fifth Unit attempted to the direct line of Peak Kantega north face in Autumn 2008 on different time from ‘the 60th anniversary’ project. Unfortunately they were forced to stop climbing at the last moment due to an accident. I would like to applaud their bold challenge.

With regards to domestic programs, we organized many activities like ‘Summer tent in Kamikochi’, ‘Trip to flower mountains & alpine plant observation’, ‘Photo exhibition & Lecture of Lhotse North Face’ and ‘To enrich websites of Shinshu University Alpine Club & Academic Alpine Club’.

We are glad to say that there were so many participants in those activities.

I have to say that we could achieve great results on our projects because of the parties concerned and applying ‘Shinshu University Academic Alpine Club Mr. Masaru Ogawa Mountain Foundation’.

Special thanks to their encouragement and cooperation with us.

On a final note, all our club member who involved this project have to take over these great experiences to younger generation and I hope them to built up the energy for 70th anniversary.

I believe it will lead to membership growth and make to be a true leader with the scale and ability in University Alpine Clubs in Japan.

